



こども 歴史 なぜなに? 相談室



昔のトイレはどうなっていたの?

最初に問題です。漢字で「米が異なる」と書いて何と読むでしょう?

正解は「糞」(くそ・ふん)です。糞は「便」ともいいます。人間はものを食べないと生きていけません。食べたものは、やがて異なったもの(便)となって外に出ていきます。「便」を出す場所が「トイレ」です。いつの時代にもトイレはなくてはならないものですが、昔のトイレはどうなっていたのでしょうか。

日本ではその昔、トイレのことを「厠」と呼んでいました。この厠の語源には、①川屋=川のほとりに作られたという説と②側屋=母屋の側に作られたものという説の二つがあるとされています。

古い遺跡から見つかったものと、①の説が有力なようです。およそ2000年前(縄文時代末～弥生時代)の遺跡からは川の側に棧橋を作っていた跡が見つかっており、棧橋の周りに糞の化石が残っていたことから、ここで用を足していたと考えられています。藤原京や平城京(今からおよそ1300年前)でも、溝を掘ったり木製の桶を作って水を流す「水洗トイレ」が作られていました。私たちは「水洗トイレ」は新しいものとイメージしがちですが、意外と古いものであったことがわかります。ただ、全てが水洗であったわけではなく、汲取トイレもありましたし、今からおよそ850年前(平安時代の終わり頃)に描かれた「餓鬼草紙」には、高下駄を履いて路地で用を足している庶民の姿が描かれています。

それでは、この歴史博物館のメインテーマである「中世」のトイレはどんなものだったのでしょうか。

草戸千軒からは便所と考えられる穴がいくつか見つっていますが、はっきりと断言はできません。おそらくは溝や池で、あるいは道端で用を足していたのでしょう。草戸からは高下駄が多く出土していますから「餓鬼草紙」に描かれたような光景が実際に見られたのかもしれませんが。

最近では、土に含まれる寄生虫などを分析するという方法でトイレかどうかわかるようになりました。戦国時代の有力な武将であった吉川元春の館跡では、地中に桶を二つ埋めた跡が見つかりました。土を分析した結果、寄生虫の卵や植物の種子や花粉が検出され、トイレであることが確認されました。



吉川元春館跡から見つかったトイレ

トイレを詳しく調べていくと当時の人々の暮らしがわかります。寄生虫の卵をみると、肥をまいて作った野菜や川魚を生に近い状態で食べていたことがわかります。また、バナナの花粉が多量に見つかりましたが、これはおなか痛くなった時の薬として飲まれていたようです。

現在では、用を足した後はトイレトーパーでふき取ります。昔は紙が貴重品でしたから、木でふき取っていました。この木を「藁木」といいます。吉川元春館跡のトイレ跡からは多量の藁木が見つかります。藁木は、長さ18～25cm位で、箸のような形をしています。短く折れたものが多いことから、一本を何回かに分けて使用し、使った部分を折って捨てていたと考えられます。



藁木(吉川元春館跡出土)

どうやら節約していたようです。

私たちは、昔のトイレ=汲取トイレというイメージを何となく持っていますが、これには農業が発達していくなかで糞尿が「肥料」として利用されていったことが大きく影響しています。糞尿を肥料として再利用することは、究極のリサイクルであり、地球にやさしいものといえるでしょう。水洗トイレが普及した現在、汲取トイレは縁遠くなっていますが、せめて資源を大切にしよう心がけたいものです。